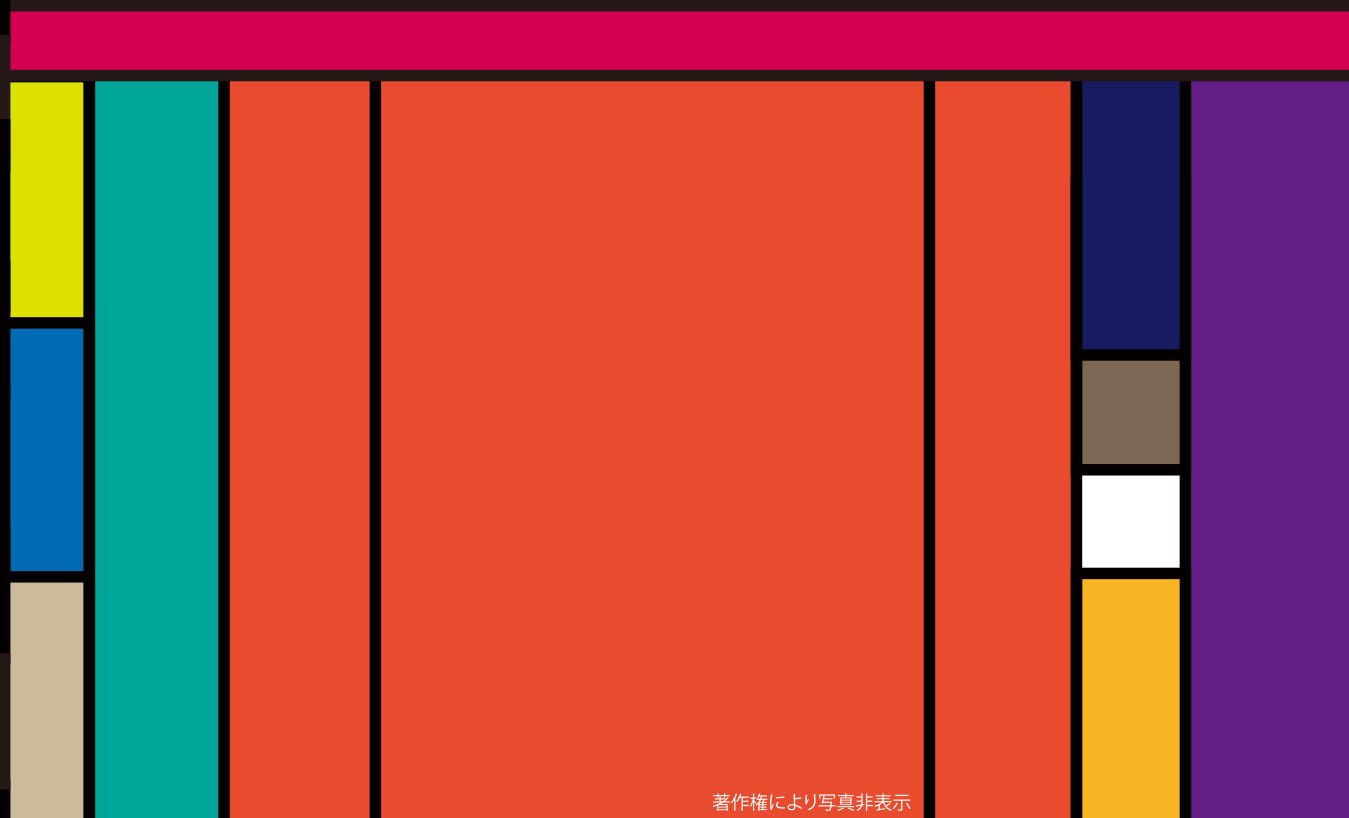


Aria -大分音楽幻想-



著作権により写真非表示

大分に『文化の風穴を』
美しい旋律が吹き抜ける。

ピアニスト・園田高弘



ピアニストとして世界的に活躍した園田高弘は、東京で生まれ育ったが、父親が大分出身だったこともあり、その名を取って、大分で1985年から2001年まで『園田高弘賞ピアノコンクール』が行われ、自身も多くのコンサートを行っている。このコンクールは、当時の平松守彦知事の要請に答え、大分に文化の風穴を開ける目的で始められ、若手ピアニストの登竜門として全国から多くの参加者が集まった。若手ピアニストとして活躍する田村響も1位入賞者の一人だ。このコンクールは課題が幅広く、現代曲や邦人作曲家の作品も含まれるなど、若手演奏家にとっては、すべてを弾きこなすことはなかなか難しいと言われたが、これは園田自身の姿を彷彿とさせるものだ。園田の演奏は、ベートヴェン、シューベルトなどから、現代音楽

に至るまでレパートリーが極めて広く、日本人作曲家の作品も多く取り上げていた。

園田の死後、大分での園田に関する話題は必ずしも多くはないが、大分市内のiichiko総合文化センターにほど近いビルの外壁と、総合文化センター内のiichiko音の泉ホールのリリーフ中央に園田高弘のレリーフが掛けられていて、彼の存在を忘れ得ないものになっている。そのいずれもが、弟子達や園田を偲ぶ会によって寄付されたものだと言った。



レリーフ [iichiko音の泉ホール]

園田の父親の清秀は優れた音楽教育者であり、独自のメソッドを持っていたことで知られるが、高弘が小学生の頃に亡くなっている。しかし高弘は子供時代とはいえ、その父親の薫陶を受けて、厳しい練習に耐え素晴らしい素質を開花させた。園田が審査員を務めた国際的なピアノコンクールを列挙すれば、

	開催都市	コンクール名
1985	ワルシャワ	ショパン国際ピアノ・C
1986	テルアヴィヴ	ルービンシュタイン国際ピアノ・C
1986	トロント	国際パッパピアノ・C
1989	パリ	ロン＝ティボー国際C
1989	フォートワース	ヴァン・クライバーン国際ピアノ・C
1990	モスクワ	チャイコフスキー国際ピアノ・C
1993	ミュンヘン	ミュンヘン国際音楽C
	フォートワース	ヴァン・クライバーン国際ピアノ・C
1994	テルアヴィヴ	ルービンシュタイン国際ピアノ・C
1995	ブリュッセル	エリーザベト王妃国際音楽C
1996	ホルツアーノ	ブゾーニ国際ピアノ・C
1997	ウィーン	ベートーヴェン国際ピアノ・C
1999	ドルトムント	国際シューベルトピアノ・C
	ブリュッセル	エリーザベト王妃国際音楽C
2003	ブリュッセル	エリーザベト王妃国際音楽C

如何に彼が多様な作曲家の演奏に長じていたか、また欧米で高く評価されていたかが分かる。右表にあるように、コンクール出演歴だけでも驚異的ですからある。

さて、1950年代には詩人の滝口修造が音頭をとって、様々な芸術分野のアーティスト14名が集まって、『実験工房』というグループを作っており、園田もその一員に名を連ねていた。メンバーには作曲家の武満徹や画家の駒井哲郎、照明家の今井直次など、その時代を代表する芸術家達が揃っていた。戦後の復興から我が国が新たな展開を見せ始めた時代への大きな変換点にあつて、このグループは前衛的な気質と異分野の芸術家達との交友によって、様々な影響を及ぼし合ってきた。彼の芸術に

も影響を与えていることは確かである。

ちなみに、先に述べたレリーフ制作は、時代の建築家ガウディの設計になるバルセロナのサグラダ・ファミリア教会で彫刻主任を務めている外尾悦郎氏によるもので、氏の夫人が園田の京都芸大教授時代の教え子だった縁から、同氏が快くデザインを引き受けたものと聞いて、改めて園田の存在の大きさを感じたのである。

大学に通う道沿いには、季節毎に様々な花々が咲き誇っている。園田の色彩豊かな演奏に思いを馳せる。

中山欽吾



通学路の花々



中山欽吾 なかやまきんご
iichiko総合文化センター館長
公益財団法人大分県文化スポーツ振興財団理事
大分県立芸術文化短期大学理事長兼学長
公益財団法人東京二期会理事長